

青梅市文化財ニュース

第 1 2 3 号

平成10年 1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

記録が引き出す学問と知識

私達が何気なく記録をしたりメモをしたりする行為は、時間が経つにつれ、その文面や内容が不要となり、忘れ去られてしまうことが普通です。ところが、残しておくつもりで、書くに至った文書、例えば、日記や証文、絵画などは、その内容により、思わぬところで、その当時の風景や民族を表している事に気がつきます。これらは、当時の人々がどのような生活をしていたのか、どのような世相であったのかを表わす生きた資料となるわけです。そうして、数多くある分野の中を特定し、その内容をもっと深く追求していくことにより、新たな内容や、既存の記録における個々の地域での状況を確認できる一つの動機づけとなることとなります。青梅市に残る庶民の記録の中で、安政12年から明治30年まで、七冊にわたって記録された村落記録に『市川家日記』があります。今までにも多くの方々により、色々と紹介されてきたものではありますが、改めて読んで気を引くものに、天体と地震、そして気候に関するものが書かれていたことでした。この内容を多くの資料をもとに調べて行くと、その地域だけの出来事であったり、全国での規模に対し、青梅はどのような状況だったのかなど、興味を持つ者にとっては、異なった分野での学問の動機づけとなるわけです。まずはここで、天体や地学に関する項目を、青梅市史史料集第46号『市川家日記』から原文のまま紹介してみます。

万延二年辛酉年（1861）、「五月廿五日の夜よりはうきほし出る。此辺にて八月廿八日の夜初て見る。長さ三間斗に見へる。くれ六ツ過宵に亥の方に出る。さきの方は辰迄の方へ向。図の如く也。毎夜々々少々つゝ南の方へ寄て出る。六月廿日頃は少々に相成見へける。」同年十月の項に、「同八日の夜、四ツ時（午後十時）頃ぢしんゆる。」

文久二年戊辰（1862）三月の項に、「同五日の夜の四ツ時、大じしんゆる。」八月の項には、「一、去る七月中旬、八月初り頃、戌亥の方にかわり星出るお云。其形はうき星のごとくに見へると也。七月十五日の夜、此星の先に付たる星こぼれとび出し未申の方へ多くとびけるが、是は皆病ひぼし也との咄し有。」と記され、少し不気味なそして人々の恐れを感じさせる表現がされています。時は過ぎ、

明治七甲戌年（1874）、「一、九月上旬の頃の風聞に乾の方にほうき星出るとの咄し。尤日のくれ合に出るとの事也。何れの星にて候哉、此辺者は見たる人もなし。」

明治十六年（1883）九月の項では、「八月三十日、三十一日、九月一日、二日、右の四日、日輪赤くして光り無之候。」

明治廿四年（1891）の十月の項では、「一、十月廿八日、前八時頃に長地震ゆる。此日尾張国、近江国、美濃の国大地震にて人多く死すと云。」

明治廿七年（1894）六月の頃では、「六月廿日、極上晴にて大きに暑し。後の二時頃に大地震ゆる。又五時頃に小ぢしんゆる。此ぢしんにて家つぶれ人死等もあり。横浜大ぢしん。大阪、長崎も大ぢしん成との事也。」

以上がこの日記に記された内容の一部です。これらを読むと、青梅市内に住みながら、実際に自分自身で感じた状況を記したもの、そしてなんらかの伝達手段にて収受した内容を市内の現状合わせて語るものなど様々です。

既述の中で、明治廿四年の項や明治廿七年の項を『東京百年史』に照合してみると、前者では、「10月28日付、岐阜県愛知県一帯に大地震（濃尾大地震）」と記され、後者では「6月20日付、東京地方に地震、倒壊家屋90戸、破損4830戸、死者24人」と書かれています。その他の地震やほうき星についての記録は詳しく調べていませんが、少なくとも、最近話題になっている地震の周期や局地的直下型地震の存在など、地学分野での学問の広がりを与えてくれるばかりではなく、肉眼で見た範囲でのほうき星の状況など、青梅市ではどのようなことかという事が表されていることに重要性があるように感じられます。市川家日記の解説においても述べられていますが、農業という一番重要なことを中心に考えると、どうしても書かざるをえない天候に関する事がいたるところに記録されています。そして、人と人々が共に助け合って生活する上で行われる慶事やあ凶事、そして、火災や犯罪なども書かれており、これらのデータの活かし方によっては、青梅市の年表へ新たな項目を書き加える事にも通じてくるわけです。

古文書でも絵画でも物事の記録です。皆さんのそれぞれの楽しみ方を土台に、もう一歩進んだ分野を追求することにより、知識も充実し、より一層、青梅市での出来事の理解が深まることと思います。

（文責 鈴木）